

自己評価報告書

平成 23年 5月 9日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2008～2011

課題番号：20242026

研究課題名（和文） 身体化された心の人類学的解明

研究課題名（英文） Anthropological Inquiry into the Embodied Mind

研究代表者

菅原 和孝（SUGAWARA KAZUYOSHI）

京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授

研究者番号：80133685

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：身ぶり、環境認識、記憶、心の所在、知覚

1. 研究計画の概要

「身体化された心」(embodied mind)を軸に、フィールドワークと理論的探究とを統合することによって、人間社会の構造と人びとの実践の様態を実証的に解明することを目的にする。フィールドワークでは、「心／身体」「文化／自然」といった二元論を克服する観察・記述・分析を徹底し、理論探究では、文化人類学を支配してきた表象主義を乗り越える新しいパラダイムを樹立する。「身体化された心」の根幹は、「人間の世界認識は身体の直接経験に基づく」という命題である。「身体化」という位相に着目することによって、認知と言語活動を新しい視角から照射する。さらに、民族誌的な文脈に埋めこまれた行為と実践を分析することによって、「身体化された心」を文化人類学にとって真に有効なパラダイムへ鍛えあげる。

2. 研究の進捗状況

3年間に17回の研究会を開催し、以下の発表に基づき討議した。

- (1) 菅原「身体化された心の系譜」
- (2) 大村「アフォーダンスと記憶」
- (3) 鈴木「身体化された心と表象主義」
- (4) 木村「相互行為参加者の同型性」
- (5) 青木「声の力の現象学」
- (6) 定延「文法の身体的動機づけ」
- (7) 藤田「民俗芸能と暗唱」
- (8) 高木「記憶の共同探索」
- (9) 水谷「バーチャルリアリティと身体」
- (10) 細馬宏通（滋賀県立大）「身ぶりの保持と隣接ペア」
- (11) 長澤壮平（南山大）「早池峰岳神楽の象徴と身体」
- (12) 石井「憑依と主体」

(13) 金子守恵（京大）「収穫物を束ねる身体」

(14) 菅原「言語の手前から」

(15) 内堀「心のあり処の民族学的比較」

(16) 岩谷洋史（総合地球環境学研究所）「モノとの関係における身体」

(17) 松田「暴力のなかの実存」

(18) 岩谷彩子（広島大）「移動する身体」

(19) 木村・亀井伸孝（愛知県立大）・森田真生（東京大）「数学的思考の身体性」

(20) 花田里欧子（京都教大）「心理臨床における身体」

(21) 菅原「相互行為から社会へ」

(22) 渡辺文（一橋大）「関係性としてのスタイル」

(23) 高木「他者の体験の時間に住み込む」

(24) 古山宣洋（国立情報学研究所）「話者の行為可能性と聞き手の身体」

(25) 長澤志穂（南山大）「道教の瞑想法」

(26) 松嶋健（京大）「イタリア地域精神保健における演劇ラボラトリー」

(27) 菅原「3年間の回顧」。

研究代表者と研究分担者は文化人類学・心の哲学・認知科学・宗教学の文献を収集するとともに以下のテーマで現地調査を行ない関連資料を収集した。

- ① 菅原（ボツワナ）情動経験の談話
- ② 松田（西ケニア）独立教会の身体介入拒否
- ③ 内堀（サラワク）心の身体的所在
- ④ 青木（インドネシア）声の肌理と官能性
- ⑤ 河合（北ケニア牧畜民）五感の知覚経験
- ⑥ 大村（カナダ）環境のアフォーダンス
- ⑦ 石井（インド）憑依と儀礼的身体

さらに、ウェブサイトで研究成果の公表を行ない、逐次更新中である。

3. 現在までの達成度

①当初の計画以上に進展している。

17回の研究会において研究代表者、研究分担者、連携研究者のほぼすべてが最新の研究成果を発表し、さらに究明すべき問題を共有し、有機的な連関を達成したばかりでなく、隣接諸分野から研究協力者12名を招聘し、研究課題を新しい角度から照らす貴重な知見と情報を得ることができた。また、文献収集により最先端の資料を整備するとともに、フィールドワークによって、伝統社会の身体性の維持と急激な変容の双方を明るみに出す多くの情報を得ることができた。

4. 今後の研究の推進方策

今後は、研究成果を統合して一般図書の形で出版することに全力を傾注する。そのためにさらに5回の研究会を開催し、原稿の読み合わせと相互批判を行なう。すでに、章の構成の大筋は整っており、出版社との交渉も順調に進んでいるので、本年秋に出版助成を申請し、来年度末までには刊行する予定である。また、代表的な研究成果を広く一般に伝えるために本年度の後半に公開シンポジウムを開催する予定である。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計46件)

- ① Uchibori, Motomitsu 2011 Theoretical Themes for an Anthropology of Resources. *Social Science Information* 50 (1): 142-153. [査読有り]
- ② 石井(舟橋)美保 2010 「神霊との交換—南インドのプータ祭祀における慣習的制度、近代法、社会的エイジェンシー」『文化人類学』75-1: 1-26. [査読有り]
- ③ 大村敬一 2010 「自然=文化相対主義に向けて—イヌイトの先住民運動からみるグローバル化の未来」『文化人類学』75 (1): 54-72. [査読有り]
- ④ 水谷雅彦 2009 「バーチャルリアリティは「悪」か?」『哲学』60: 67-82. [査読有り]
- ⑤ Sugawara, Kazuyoshi 2009 Speech Acts, Moves, and Meta-communication in Negotiation: Three cases of everyday conversation observed among the |Gui former foragers. *Journal of Pragmatics* 41 (1): 93-135. [査読有り]

[学会発表] (計9件)

- ① 菅原和孝 「狩猟採集民グイの動物談話にみる不可視の作用主」第16回生態人類学会、2011年3月19日、京都大学。

- ② Sugawara, Kazuyoshi “The Repertoire of Body Metaphors and Their Usage in Everyday Discourse among the |Gui Former Foragers” 7th International Workshop of Emancipatory Pragmatics. 2011年2月28日、共立女子大学。

- ③ Matsuda, Motoji “Potentiality of Indigenous Knowledge at the times of Globalization From Experiences of Local Communities in Kenya, Nepal, Thai and Japan” KYOTO INTERNATIONAL WORKSHOP 2010 The Roles of Local Knowledge in Globalized Context. 2010年11月22日、京都大学。

- ④ Sugawara, Kazuyoshi “Personal Name as Mnemonic Device or Conversational Resource: A pragmatic/ethnographic study on the naming practice among the |Gui and ||Gana San” 11th International Pragmatics Conference 2009.7.17 Melbourne University, Australia.

- ⑤ 大村敬一 「イヌイトは何になるうとしているのか?—カナダ・ヌナヴト準州のIQ問題にみる先住民の未来」日本文化人類学会第42回研究大会分科会「先住民とは誰か?」2008年6月1日、京都大学。

[図書] (計24件)

- ① 菅原和孝 2010 『ことばと身体—「言語の手前」の人類学』講談社、277頁。
- ② 河合香史 (編著) 2010 『集団—人類社会の進化』京都大学学術出版会、339頁。
- ③ 木村大治・中村美知夫・高梨克也 (編著) 2010 『インタラクションの境界と接続—サル・人・会話研究から』昭和堂、445頁。
- ④ 藤田隆則 2010 『能のノリと地拍子—リズムの民族音楽学』檜書店、270頁。
- ⑤ 松田素二 2009 『日常人類学宣言! 生活世界の深層へ/から』世界思想社、343頁。
- ⑥ 定延利之 2008 『煩惱の文法 ↓体験を語りたがる人びとの欲望が日本語の文法システムをゆさぶる話 ↓』筑摩書房、200頁。

[その他]

下記のウェブサイトで、研究会報告、研究成果などを逐次公開している。

<http://www.embody.jinkan.kyoto-u.ac.jp/index.html> (サイト名「Embodied Mind: 身体化された心の人類学的解明」)